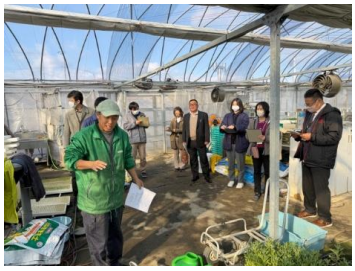
別紙

岐阜農林事務所の普及活動状況　令和７年１２月３１日現在

今月の重点活動

■農福連携　農福連携岐阜地域連携会議視察研修会を開催



【施設見学する参加者（上）と出荷調製所（下）】

12 月９日、岐阜農林事務所に事務局を置く「農福連携岐阜地域連携会議」は、三重県鈴鹿市にある就労継続支援Ｂ型事業所「わか菜の杜（もり）」を視察した。視察研修会には、農業関係者の他、特別支援学校等の福祉関係者 10 名が参加した。

事業所を運営している社会福祉法人「朋友（ほうゆう）」は、「わか菜の杜」と同市内の別農場で農福連携に取り組むＢ型事業所「コスモス」、２つの農場でとれた野菜を使った弁当や総菜を製造販売するＢ型事業所「Cotti 菜」も経営しており、３つの事業所で働く障がい者は約 40 人にのぼる。

当日は、水耕栽培の施設を見学しながら障がい者の作業性に配慮した取り組み等について説明を受けた。また、敷地内にある出荷調製所では、利用者が手際よく作業する様子を見学した。

見学の後、本事業所の伊藤良一理事長から、自身が事故で障がいを負ったことを機に、障がい者が自立して社会に参加できるよう支援することを目的に「わか菜の杜」を開設するまでの経緯や障がい者が働きやすい職場づくりの取り組み等について話をうかがった。

本研修では、先進事例を通じて農福連携の今後の取り組みについて参加者が一緒に考えるよい機会となった。

（地域支援第一係）

安心で身近な「ぎふの食」づくり

■水田農業　ＪＡぎふ水田農業担い手連絡協議会研究交流会で情報提供

【情報提供を行う普及指導員】

12 月 10 日、岐阜市のみんなの森ぎふメディアコスモスにおいてＪＡぎふ水田農業担い手連絡協議会研究交流会が開催された。当日は、土地利用型農業法人の役員や大規模生産者をはじめ、東海農政局、農林事務所、ＪＡ全農岐阜、ＪＡぎふ、資材メーカー等、約 250 名が参加した。

農林事務所からは、令和７年産米の振り返りと８年産に向けた取り組み、特に病害虫対策について情報提供を行った。その他、「ハツシモ食味コンテスト」の表彰や「米穀情勢」、「バイオスティミュラントを用いた高温対策」、「みどり認定、みえるらべる」、「令和８年産水田活用米穀の取り組み」等について情報提供が行われた。

水田農業の担い手は、米価は上昇したものの先行きは不透明であり、さらに今後も高温年が続くと予想される中、次年度の作付に向けた計画を立てる重要な時期を迎えている。今回の研究交流会は、そうした状況下で非常に有意義な機会となった。

農林事務所では、次年度の営農計画策定に向け、今後も各種情報提供やアドバイスを行っていく。

（地域支援第三係）

■小麦　令和８年産「タマイズミＲ」の播種作業が始まる

【播種作業を行う農家】

岐阜地域では、営農組合や大規模個人農家が稲刈後の水田を活用して小麦を栽培しており、令和８年産は約 525ha の作付けが計画されている。栽培品種は、今作から長年栽培していた「タマイズミ」から、「タマイズミ」を改良してコムギ縞萎縮病に強くした「タマイズミＲ」となり、播種作業は 10 月 28 日から開始されている。

「タマイズミＲ」を初めて栽培する農家も多いことから、農林事務所はＪＡと連携し、栽培暦の作成支援や栽培研修会等を通じて、栽培方法の周知や排水対策の徹底の指導を行っている。

また、岐阜地域の３市（岐阜市、羽島市、本巣市）で「タマイズミＲ」の減プラスチック肥料の試験を実施する等、環境にやさしい小麦生産に向けた支援も行っている。

今年は天候に恵まれたこともあり、播種作業は順調に進んでおり、これまでのところ発芽は良好である。今後、農林事務所では各地域に調査ほを設けて生育状況を把握するとともに、雑草対策や施肥管理について指導し、令和８年産小麦の安定生産を図っていく。

（地域支援第二係）

■大豆　順調に収穫が終わる（羽島市）

【汎用コンバインを用いた
収穫作業】

岐阜地域では、営農組合や大規模個人農家が水田を活用した大豆栽培を実施しており、今年度は 155.6ha が作付けされた。

羽島市内では２営農組合が計 11.4ha を栽培し、生育は順調に進んだ。一方、８月４日付けで病害虫防除所から「ハスモンヨトウ」の病害虫発生予察注意報が発令され、羽島市でも８月中旬からフェロモントラップによる捕獲頭数の増加に伴い、新葉に食害が確認されたことから防除指導を行った。

その後は順調に粒肥大と黄化・落葉が進み、収穫期を迎えたことから営農組合は 12 月５日から収穫作業を開始した。天候に恵まれたことから品質も良好で、12 月 10 日には収穫を完了した。

農林事務所では、今年度の生育状況及び生産結果等を取りまとめ、次年度の大豆の安定生産に向けた支援を行う。

（地域支援第二係）

ぎふ農畜水産物のブランド展開

■かき　各地域で間伐剪定講習会を開催

【剪定講習会の様子】

今年度のかきは、昨年度に引き続き夏秋期の高温・干ばつにより、晩生品種では小玉果が多く、着色遅れも発生し、非常に厳しい年となった。しかし、昨年度大量発生した果樹カメムシ類の被害は、防除を徹底したことで今年度は発生が少なく、良好な品質を確保することができた。

各地域では、かきの出荷終了に伴い、次年度に向けて反省会や間伐・整枝剪定講習会が開催された。農林事務所からは、高温環境下でも安定出荷をするための、剪定・栽培管理方法等を中心に技術支援を行った。参加者からは、質問も多くあり、岐阜地域の特産であるかきの品質や産地を守るためにできることをやりたいという強い思いが感じられた。

農林事務所では、栽培上の課題を解決するために調査・実証を行い、産地への適確な情報提供を引き続き行っていく。

（園芸産地支援第二係）

■さといも　収穫・出荷作業が始まる

【高温・干ばつによる
葉焼けの様子】

各務原市では、さといもが水田転作振興作物として作付けされており、11 月から収穫・出荷作業が始まっている。

今年度のさといもは、昨年度に引き続き高温や干ばつの影響を受け、葉焼けや小玉等、生育や品質に課題が見られる。9 月に降雨があったため、昨年度と比較すると高温や干ばつによる影響はやや軽減されたものの、品質面では小玉やひび割れ等、引き続き不安定なほ場が見られている。

害虫については、ハスモンヨトウの発生が昨年度に引き続き多く見られたが、被害程度は昨年度ほどではなかった。一方、夏季の少雨・高温条件によりハダニ類が多発したため、農林事務所では急遽、防除対策に関する資料を作成し、生産者へ配布するなど注意喚起を行った。この他、一部ほ場ではコガネムシ類幼虫による被害も確認された。

農林事務所では、来年度に向けて、生育状況に応じた適切な灌水時期・方法の指導を徹底するとともに、ハスモンヨトウやハダニ類、コガネムシ類幼虫等を想定した防除体系の検討を進めていく。

（地域支援第二係）